



ひだまり君



がんという突然の病気に孤独な気持ちになったり、治療や生活で悩む方は多いと思います。ひだまりカフェで体験者同士、ゆっくりいろいろな話をしてみませんか。看護師をはじめ、さまざまな医療スタッフもお待ちしております。

編集後記

ある医師と患者のエピソードを紹介します。

12年前、告知直後の茫然自失の中で、チーム医療が始まりました。主治医であるA医師は、放射線科の名医であるB医師の治療を強く薦めました。が、どうにもならない事情を抱えていた患者は、頑なにB医師の治療を断ってしまいます。

命を見つめる必死のA医師にB医師は、「患者さんがこれだけ言っているのだから仕方ないでしょう」と、患者の視線まで降りてきてくれ、A医師を説得してくれたのです。

大変失礼なことをしたにも関わらず、思いもかけないサポートをもらって、患者はどれだけ救われたことでしょうか。

そう、お察しの通り、患者は私、B医師こそ早川先生です。どちらの医師の言動にも心から感謝し、その後も北里のハートあるチーム医療に救われ、現在に至っております。

医師とは何たるかを身をもって体感した出来事でした。

早川先生、どうかお元気でこれからも患者に癒しを与え続けてください。長い間ひだまりサロンを支えてくださりありがとうございました！！

福井砂夕里



北里がんサロン ひだまりカフェ

1号館1階 集団指導室で 開催しています。



ひだまり通信や
ミニ医療講座の
予定もHPで掲載中

<https://www.kitasato-u.ac.jp/khp/index.html>

「北里大学病院」で検索 ➡ トータルサポートセンター ➡ 患者支援センター

※原稿募集※ ひだまり通信に 皆さまの声を載せてみませんか？

ご希望の方は ひだまりカフェにお持ちいただくかトータルサポートセンター職員までお声かけください。ご応募お待ちしております。

毎年恒例のクリスマス会が開催されました



がん体験者の
方々による
素敵な演奏に
癒されました





「マインドフルネス」をはじめ、がんサロンでの数々のハートフルな講義で励まされたかたも多かったと思います。早川先生が今年度をもってご退職となります。がんサロンへのメッセージをいただきました。



いのちを生きるということ

早川和重(北里大学病院副院長「教育・研修統括担当」)

いのちは「生命」とも書き、辞書では「生物が示す基本的な特質と考えられているもの」と記されています。広辞苑では「性命」とも書かれており、生命とは「万物が天から授かったそれぞれの性質と運命」と記載されています。科学が進歩した今日でも、人間は細胞一つをも作ることができないことからしても、生物の誕生は神秘的な事象であり、人間が誕生すること自体、奇跡といわざるをえません。皆さんは、この大切ないのちをどのように生きようと考えていますか。



一般的に寿命とは「いのちの長さ」と考えている人は多いと思います。でも「いのちの長さ」は最初から決まっているのでしょうか。日野原重明先生は、「寿命とは、最初から決まった時間の長さではない。いのちの長さはあまり問題ではない」と述べています。「寿命とは、自分が持って使える時間のことであり、自分が使える自分のいのち、時間であるいのちを、いつ、どのように使うか、が大切である」とも述べています。「自分のためにではなく、人のために生きようとするとき、その人は、もはや孤独ではない」というのです。日野原先生は、子供たちへの著書の中で「時間に命を吹き込むことによって寿命となる」と教えられています。すなわち「いのちを生きる」とは、時間を上手に使うことであり、だれかのために役立つことであつたり、後世のために良い文化(伝統・技術・習慣)を伝えることであると言えるのではないのでしょうか。

元京都大学総長であつた平澤興先生は、生命には植物的生命、動物的生命、精神的生命の3つがあると述べられています。すなわち、植物的生命とは、生きるために直接必要な呼吸、消化、循環、成長をつかさどる ↗



ものであり動物的生命とは、植物を探したり、敵に向かったり、逃げたりという本能であり、精神的生命は、魂を伴い、老いを知らず、永遠に成長し続けるものを意味します。前の2つは正に生命の基本的な特質と考えられますが、精神的生命(Spirit)は、人間にこそ備えられた生命と考えられます。

最近では、毎年のように日本人がノーベル賞を受賞しています。しかし、村上和雄先生(筑波大学名誉教授)に言わせると「ノーベル賞受賞者の多くは若い頃は優等生ではなく、どこか鈍で、深く大きく思考する人間であり、遠回りをしながらも確かな成果を挙げ、時間はかかるけれども、思考の器が大きい『大鈍才』である」と述べています。大発見や発明には、偶然な幸運がつきものであるといわれていますが、この運とは蓋然性の高いもので努力していれば必ず幸運を得られるというわけでもなく、努力なしで幸運がめぐってくることもないのです。幸運を得るには、①素直で注意深い目、②無駄を尊ぶ心、③失敗や間違いから「何か」を見出し、つかみ取る力、が条件として挙げられています。要は、あらゆる事象や他人の意見に対して謙虚な姿勢が重要であることを意味しています。階段を一足飛びにではなく、一段一段上がっていくことの集積が、いつのまにかその人の技量や人格を(はなやかさや鋭さに欠けても)手堅く分厚いものにする、実はこういう人間こそ組織の支柱になる、ということなのだと思います。

「自分だけよければいい」という心では真の幸福感は味わえません。人間は「人のために生きることによって自分の幸せをつかむ」ために働いているのかもしれない。魅力的な人間になるためのヒントとして平澤先生の言葉を以下に紹介しましょう。「欠点をなおせというよりも、長所をのばしなさい。長所といえども癖である。この方の癖をのばせば、悪い癖もその大きさの中にかくれてしまう。大木も小さい時は曲がっていても、大木になればまっすぐになるようなものである。そしてかくれた癖は時に応じてその人の味わいとなり花となって、その人に芸術味を与えることになる。」

私たちは普段の生活のあらゆる場面で「学ぶ」機会はたくさんあります。「読書する」、「社会で様々な方と交流する」ことは人間の魂が良い方向に成長するように良い遺伝子のスイッチをONにするための手段です。「誕生」や「出会い」、「生きている」ことが奇跡であることを理解し、そのことに感謝することが「充実した人生を過ごす(幸せになる)」ために最も大切なことではないのでしょうか。

